

# 追憶

芥川龍之介

青空文庫



## 一 埃

僕の記憶の始まりは数え年の四つの時のことである。と言つてもたいした記憶ではない。ただ広さんという大工が一人、梯子はしごが何かに乗つたまま玄能で天井を叩たたいている、天井からはぱつぱつと埃ほこりが出る——そんな光景を覚えているのである。

これは江戸の昔から祖父や父の住んでいた古家を毀こわした時のことである。僕は数え年の四つの秋、新しい家に住むようになった。したがつて古家を毀したのは遅おそくもその年の春だったであろう。

## 二 位牌

僕の家うちの仏壇には祖父母の位牌いはいや叔父おじの位牌の前に大きい位牌が一つあつた。それは天てんぼう保何年かに没した曾祖父母そうそふぼの位牌だつた。僕はもの心のついた時から、この金箔きんぱくの黒ずんだ位牌に恐怖に近いものを感じていた。

僕のものちに聞いたところによれば、曾祖父は奥坊主を勤めていたものの、二人の娘を二人とも花魁おいらんに売つたという人だつた。のみならずまた曾祖母も曾祖父の夜泊まりを重ねるために家に焚たきもののない時には鉈なたで縁側えんがわを叩き壊し、それを薪たきぎにしたという人だつた。

## 三 庭木

新しい僕の家の庭には冬青もち、榧かや、木斛もっこく、かくれみの、臘梅ろうばい、八つ手、五葉の松などが植わっていた。僕はそれらの木の中でも特に一本の臘梅を愛した。が、五葉の松だけは何か無気味でならなかった。

## 四 「てつ」

僕の家うちには子守こもりのほかに「てつ」という女中が一人あつた。

この女中はのちに「源げんさん」という大工のお上さんになったために「源げんてつ」という渾あだな名もらを貫もらつたものである。

なんでも一月か二月のある夜、（僕は数え年の五つだった）地震のために目をさました「てつ」は前後の分別を失つたとみえ、枕まくらもとの行あんどん灯とんをぶら下げたなり、茶の間から座敷を走りまわつた。僕はその時座敷の畳に油じみのできたのを覚えている。それからまた夜中の庭に雪の積もっていたのを覚えている。

## 五 猫の魂

「てつ」は源げんさんへ縁ゆかりづいたのちも時々僕の家うちへ遊びに来た。僕

はそのころ「てつ」の話した、こういう怪談を覚えていゝる。――  
ある日の午後、「てつ」は長火鉢ながひばちに頬杖ほほづえをつき、半睡半醒はんすいはんせの境にさまよっていた。すると小さい火の玉が一つ、「てつ」の顔のまわりを飛びめぐり始めた。「てつ」ははつとして目を醒さました。火の玉はもちろんその時にはもうどこかへ消え失うせていた。しかし「てつ」の信ずるところによればそれは四、五日前に死んだ「てつ」の飼ねこい猫の魂がじゃれに来たに違ちがいないといふのだった。

## 六 草双紙

僕の家うちの本箱には草双紙くさぞうしがいつぱいつまっていた。僕はもの心のついたころからこれらの草双紙を愛していた。ことに「西さい遊記うき」を翻案した「金毘羅利生記こんびらりしやうき」を愛していた。「金毘羅利生記」の主人公はあるいは僕の記憶に残った第一の作中人物かもしれない。それは岩裂いわさきの神という、兜巾鈴懸とぎんすずかけを装った、目まなざしの恐ろしい大天狗だいてんぐだった。

## 七 お狸様

僕の家うちには祖父の代からお狸たぬきさま様さまというものを祀まつっていた。それは赤い布団にのつた一对の狸たぬきの土偶でくだった。僕はこのお狸様

にも何か恐怖を感じていた。お狸様を祀ることはどういう因縁によつたものか、父や母さえも知らないらしい。しかしいまだに僕の家には薄暗い納戸なんどの隅すみの棚たなにお狸様の宮を設け、夜は必ずその宮の前に小さい蠟燭ろうそくをともしている。

## 八 蘭

僕は時々狭い庭を歩き、父の真似まねをして雑草を抜いた。實際庭は水場だけにいろいろの草を生じやすかった。僕はある時冬青もぢの木の下に細い一本の草を見つけ、早速それを抜きすててしまった。僕の所業を知った父は「せつかくの蘭らんを抜かれた」と何度も母に

こぼしていた。が、格別、そのために叱しかられたという記憶は持っていない。蘭はどこでも石の間に特に一、二茎けい植えたものだつた。

## 九 夢中遊行

僕はそのころも今のようからだに体の弱い子供だつた。ことに便秘べんぴしさえすれば、必ずひきつける子供だつた。僕の記憶に残っているのは僕が最後にひきつけた九歳の時のことである。僕は熱もあつたから、床の中に横たわつたまま、伯母おばの髪を結うのを眺ながめていた。そのうちにいつかひきつけたとみえ、寂うみべしい海辺を歩いていった。そのまた海辺には人間よりも化け物に近い女が一人、腰巻き

一つになつたなり、身投げをするために合掌していた。それは  
「妙々車」という草双紙の中の插画さしえだったらしい。この夢うつ  
つの中の景色だけはいまだにはつきりと覚えている。正気になつ  
た時のことは覚えていない。

一〇 「つうや」

僕がいちばん親しんだのは「てつ」のちにいた「つる」であ  
る。僕の家はそのころから経済状態が悪くなつたとみえ、女中も  
この「つる」一人ぎりだった。僕は「つる」のことを「つうや」  
と呼んだ。「つうや」はあたりまえの女よりもロマンティック趣

味に富んでいたのものであろう。僕の母の話によれば、法界ほうかい節ぶしが二、三人編あみ笠がさをかぶつて通るのを見ても「敵かたきう討うちでしようか？」と尋ねたそうである。

## 一 郵便箱

僕うちの家の門そばの側には郵便箱が一つとりつけてあつた。母や伯母おばは日の暮れになると、かわるがわる門の側へ行き、この小さい郵便箱の口から往来の人通りを眺ながめたものである。封建時代らしい女の気もちは明治三十二、三年ころにもまだかすかに残つていたであろう。僕はまたこういう時に「さあ、もう雀色すずめいろ時どきになつ

たから」と母の言ったのを覚えている。雀色時という言葉はそのころの僕にも好きな言葉だった。

## 一二 灸

僕は何かいたずらをする、必ず伯母おばにつかまっては足の小指きゆうに灸きゆうをすえられた。僕に最も怖ろおそしかったのは灸の熱さそれ自身よりも灸をすえられるということである。僕は手足をばたばたさせながら「かちかち山だよう。ぼうぼう山だよう」と怒鳴ったりした。これはもちろん火がつくところから自然と連想れんそうを生じたのであろう。

## 一三 剥製の雉

僕の家へ来る人々の中に「お市さん」という人があつた。これは代地だいちかどこかにいた柳派の「五りんご」のお上さんかみだつた。僕はこの「お市さん」にいろいろの画本えほんや玩具おもちゃなどを貰もらつた。その中でも僕を喜ばせたのは大きい剥製はくせいの雉きじである。

僕は小学校を卒業する時、その尾羽根の切れかかった雉を寄附していったように覚えている。が、それは確かではない。ただいまだにおかしいのは雉の剥製を貰つた時、父が僕に言つた言葉である。

「昔、うちの隣にいた××××（この名前は覚えていない）という人はちようど元日のしらしら明けの空を白い鳳凰ほうおうがたった一羽なかず、中洲なかつの方へ飛んで行くのを見たことがあると言っていたよ。もつともでたらめを言う人だったがね」

#### 一四 幽霊

僕は小学校へはいつていたころ、どこの長唄ながうたの女師匠は亭主おんりようの怨霊おんりようにとりつかれているとか、ここの仕事師のお婆さんばあは嫁の幽霊に責められているとか、いろいろの怪談を聞かせられた。それをまた僕に聞かせたのは僕の祖父の代に女中をしていた「お

てつさん」という婆さんである。僕はそんな話のためか、夢とも現<sup>うつ</sup>ともつかぬ境にいろいろの幽霊に襲われがちだった。しかもそれらの幽霊はたいていは「おてつさん」の顔をしていた。

## 一五 馬車

僕が小学校へはいらぬ前、小さい馬車を驢<sup>ろ</sup>馬<sup>ば</sup>に牽<sup>ひ</sup>かせ、そのまま馬車に子供を乗せて、町内をまわる爺<sup>じい</sup>さんがあった。僕はこの小さい馬車に乗って、お竹倉や何かを通りたかった。しかし僕の守<sup>も</sup>りをした「つうや」はなぜかそれを許さなかった。あるいは僕だけ馬車へ乗せるのを危険にでも思ったためかもしれない。けれ

ども青い幌ほろを張った、玩具おもちゃよりもわずかに大きい馬車が小刻みにことこと歩いているのは幼目にもハイカラに見えたものである。

## 一六 水屋

そのころはまた本ほん所じよも井戸の水を使っていた。が、特に飲用水だけは水屋の水を使っていた。僕はいまだに目に見えるように、顔の赤い水屋の爺じいさんが水みず桶おけの水を水みず甕がめの中へぶちまける姿を覚えている。そう言えばこの「水屋さん」も夢ゆめ現うつの境に現われてくる幽霊の中の一人だった。

## 一七 幼稚園

僕は幼稚園へ通いだした。幼稚園は名高い 回向院えこういんの隣の江東  
小学校の附属である。この幼稚園の庭の隅すみには大きい 銀杏いちようが一  
本あつた。僕はいつもその落葉を拾い、本の中に挟はさんだのを覚え  
ている。それからまたある 円顔まるがおの女生徒が好きになつたのも覚  
えている。ただいかにも不思議なのは今になつて考えてみると、  
なぜ彼女を好きになつたか、僕自身にもはつきりしない。しかし  
その人の顔や名前はいまだに記憶に残っている。僕はつい去年の  
秋、幼稚園時代の友だちに遇あひ、そのころのことを話し合つた末、  
「先方でも覚えていたかしら」と言つた。

「そりや覚えていないだろう」

僕はこの言葉を聞いた時、かすかに寂しい心もちがした。その人は少女に似合わない、萩はぎや芒すすきに露の玉を散らした、袖そでの長い着物を着ていたものである。

## 一八 相撲

相撲すもうもまた土地がらだけに大勢近所に住まっていた。現に僕の家うちの裏の向こうは年寄りの峯岸みねぎしの家だったものである。僕の小学校にいた時代はちょうど常陸山ひたちやまや梅ヶ谷の全盛を極きわめた時代だった。僕は荒岩亀之助が常陸山を破ったため、大評判になった

のを覚えている。いつたいひとり荒岩に限らず、国見山でも逆さかほ鉾こでもどこか錦にしきえ絵の相撲に近い、男ぶりの人に優すぐれた相撲はことごとく僕の鼻ひいき肩かただった。しかし相撲というものは何か僕にはばくぜんとした反感に近いものを与えやすかった。それは僕が人並みよりも体からだが弱かったためかもしれない。また平生見かける相撲が——髪を藁わら束たばねにした禪ふんどしかつぎが相撲膏すもうこうを貼はっていたためかもしれない。

## 一九 宇治紫山

僕の一家は宇治紫山うじしざんという人に一いち中ちゆう節ぶしを習まなっていた。この

人は酒だの遊芸だのにお蔵前の札差しの身しんしょう上うをすつかり費やしてしまつたらしい。僕はこの「お師匠さん」の酒の上の悪かつたのを覚えてゐる。また小さい借家かにいても、二、三坪の庭に植木屋うゑを入れ、冬などは実みを持つた青木あおの下に枯れ松葉まつばを敷かせたのを覚えてゐる。

この「お師匠さん」は長命ちやうめいだつた。なんでも晩年ばんねん味噌みそを買いに行き、雪上ゆきがりの往来わらいで転んだ時ときにも、やつと家うちへ歸かへつてくると、「それでもまあ禪ぜんだけ新あたらしくつてよかつた」と言いつたそうである。

## 二〇 学問

僕は小学校へはいった時から、この「お師匠さん」の一人息子むすこに英語と漢文と習字とを習った。が、どれも進歩しなかった。ただ英語はTやDの発音を覚えたくらいである。それでも僕は夜になると、ナシヨナル・リイダアや日本外史をかかえ、せつせと相あいおいちよう生町 二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。It is a dog——ナシヨナル・リイダアの最初の一行はたぶんこういう文章だったであろう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に残っているのは、何かの拍子に「お師匠さん」の言つた「誰だれとかさんもこのごろじゃ身なりが山さんすい水みづだな」という言葉である。

僕がはじめて活動写真を見たのは五つか六つの時だったであろう。僕は確か父といっしょにそういう珍しいものを見物した<sup>おおか</sup>大川端<sup>わげた</sup>の二州楼へ行った。活動写真は今のよう<sup>おおか</sup>に大きい幕に映るのではない。少なくとも画面の大きさはやつと六尺に四尺くらいである。それから写真の話もまた今のように複雑ではない。僕はその晩の写真のうちに魚を釣<sup>つ</sup>っていた男が一人、大きい魚が針にかかったため、水の中へまっさかさまにひき落とされる画面を覚えて<sup>あし</sup>いる。その男はなんでも麦藁帽<sup>むぎわらぼう</sup>をかぶり、風立<sup>あし</sup>った柳や芦を後ろに長い釣<sup>つりざお</sup>竿を手にしていた。僕は不思議にその男の顔がネルソンに近<sup>あし</sup>かったような気がしている。が、それはことによる

と、僕の記憶の間違いかもしれない。

二二 川開き

やはりこの二州楼の<sup>さじき</sup>棧敷に川開きを見ていた時である。大川は  
 もちろん<sup>ほおずきちようちん</sup>鬼灯提灯を吊った無数の船に<sup>うず</sup>埋まっていた。すると  
 その大川の上にとつと何かの<sup>なだ</sup>雪崩れる音がした。僕のまわりにい  
 た客の中には<sup>かめせい</sup>亀清の<sup>なだ</sup>棧敷が落ちたとか、中村楼の<sup>なだ</sup>棧敷が落ちた  
 とか、いろいろの<sup>うわさ</sup>噂が伝わりだした。しかし事實は<sup>もつきよう</sup>木橋だつ  
 た両国橋の<sup>か</sup>欄干が折れ、大勢の人々の落ちた音だった。僕はのち  
 にこの<sup>ちんじ</sup>椿事を<sup>ちんじ</sup>幻灯か何かに映したのを見たこともあるように覚え

ている。

二三 ダアク一座

僕は当時回向院えこういんの境内にいろいろの見世物を見たものである。風船乗り、大蛇だいじや、鬼の首、なんとか言う西洋人が非常に高いさお桿の上からとんぼを切って落ちて見せるもの、——数え立てていれば際限はない。しかしいちばんおもしろかったのはダアク一座のあやつ操り人形である。その中でもまたおもしろかったのは道化どうけた西洋の無頼漢が二人、化けもの屋敷に泊まる場面である。彼らの一人は相手の名前をいつもカリフラと称していた。僕はいまだに花キ

ヤベツを食うたびに必ずこの「カリフラ」を思い出すのである。

## 二四 中洲

当時の中洲なかずは言葉どおり、芦あしの茂ったデルタアだった。僕はその芦の中に流れ灌かんじょう頂しやうや馬の骨を見、気味悪がったことを覚えていた。それから小学校の先輩に「これはアシかヨシか？」と聞かれて当惑したことも覚えている。

## 二五 寿座

ほんじよ  
本所の寿座ができたのもやはりそのころのことだった。僕は

ある日の暮れがた、ある小学校の先輩と元町通りを眺めていた。

するとトタンの海鼠板なまこいたを積んだ荷車が何台も通つて行つた。

「あれはどこへ行く？」

僕の先輩はこう言つた。が、僕はどこへ行くか見当も何もつか  
なかつた。

「寿座！　じゃあの荷車に積んであるのは？」

僕は今度は勢い好よく言つた。

「ブリツキ！」

しかしそれはいたずらに先輩の冷笑を買うだけだった。

「ブリツキ？　あれはトタンというものだ」

僕はこういう問答のため、妙に悄気しよげたことを覚えている。その先輩は中学を出たのち、たちまち肺を犯されて故人になったとかいうことだった。

## 二六 いじめっ子

幼稚園にはいつていた僕はほとんど誰だれにもいじめられなかった。もつとも本間ほんまの徳ちゃんにはたびたび泣かされたものである。しかしそれは喧嘩けんかの上だった。したがって僕も三度に一度は徳ちゃんを泣かせた記憶を持っている。徳ちゃんは確か総武鉄道の社長か何かの次男に生まれた、負けぬ気の強い餓鬼大将だった。

しかし小学校へはいるが早いか僕はたちまち世間に多い「いじめっ子」というものにめぐり合った。「いじめっ子」は杉浦誉四郎である。これは僕の隣席にいたから何か口実を<sup>こしら</sup>えはたびたび僕をつねったりした。おまけに杉浦の家の前を通ると狼に<sup>おおかみ</sup>似た犬をけしかけたりもした。(これは今日考えてみれば Greyhound という犬だったであろう)僕はこの犬に追いつめられたあげく、とうとうある畳屋の店へ飛び上がってしまったのを覚えている。

僕は今漫然と「いじめっ子」の心理を考えている。あれは少年に現われたサアド型性欲ではないであろうか？ 杉浦は僕のクラスの中でも最も<sup>はくせき</sup>白哲の少年だった。のみならずある名高い富豪の妾腹にできた少年だった。

## 二七 画

僕は幼稚園にはいつていたころには海軍将校になるつもりだった。が、小学校へはいったころからいつか画家志願に変わっていた。僕の叔母は狩野勝玉かのうしやうぎよくという芳崖ほうがいの乙弟子おとでしに縁づいていた。僕の叔父おじもまた裁判官だった雨谷うこくに南画を学んでいた。しかし僕のなりたかっただのはナポレオンの肖像だのライオンだのを描かく洋画家だった。

僕が当時買い集めた西洋名画の写真版はいまだに何枚か残っている。僕は近ごろ何かのついでにそれらの写真版に目を通した。

するとそれらの一枚は、樹下に金髪の美人を立たせたウイスキーの会社の広告画だった。

## 二八 水泳

僕の水泳を習ったのは日本水泳協会だった。水泳協会に通ったのは作家の中では僕ばかりではない。ながいかふう永井荷風氏やたにざき谷崎潤一郎氏もやはりそこへ通ったはずである。当時は水泳協会もあし芦の茂った中洲なかずから安田の屋敷前へ移っていた。僕はそこへ二、三人の同級の友達と通って行った。しみずまさひこ清水昌彦もその一人だった。

「僕は誰だれにもわかるまいと思つて水の中でウンコをしたら、すぐ

に浮いたんでびっくりしてしまった。ウンコは水よりも軽いもんなんだね」

こういうことを話した清水も海軍将校になったのち、一昨年おととし

（大正十三年）の春に故人になった。僕はその二、三週間前に転地先の三島からよこした清水の手紙を覚えている。

「これは僕の君に上げる最後の手紙になるだろうと思う。僕は喉こ頭うとう結核の上に腸結核も併発している。妻は僕と同じ病気に罹りかか僕よりも先に死んでしまった。あとには今年五つになる女の子が一人残っている。……まずは生前のご挨拶あいさつまで」

僕は返事のペンを執りながら、春寒はるさむの三島の海を思い、なんとかという発句を書いたりした。今はもう発句は覚えていない。し

かし「喉頭結核でも絶望するには当たらぬ」などという気休めを並べたことだけはいまだにはつきりと覚えている。

## 二九 体刑

僕の小学校にいたころには体刑も決して珍しくはなかった。それも横顔を張りつけるくらいではない。胸ぐらをとって小突きまわしたり、床の上へ突き倒したりしたものである。僕も一度は擲なぐられた上、習字のお双紙をさし上げたまま、半時間も立たされていたことがあった。こういう時に擲られるのは格別痛みを感じずるものではない。しかし、大勢の生徒の前に立たされているのはせ

つないものである。僕はいつかイタリアのファツシヨは社会主義にヒマシユを飲ませ、腹下しを起こさせるといふ話を聞き、たちまち薄汚うすぎたないベンチの上に立つた僕自身の姿を思い出したりした。のみならずファツシヨの刑罰もあるいは存外当人には残酷ではないかと考えたりした。

### 三〇 大水

僕は大水にもたびたび出合った。が、幸いどの大水も床の上へ来たことは一度もなかった。僕は母や伯母おばなどが濁り水の中に二尺指しゃくざしを立てて、一分殖いちぶふえたの二分殖にぶふえたのと騒いでいたのを

覚えている。それから夜は目を覚ますと、絶えずどこかの半鐘が鳴りつづけていたのを覚えている。

### 三一 答案

確か小学校の二、三年生のころ、僕らの先生は僕らの机に耳の青い藁わらばんし半紙を配り、それへ「かわいと思うもの」と「美しいと思うもの」とを書けと言った。僕は象を「かわいと思うもの」にし、雲を「美しいと思うもの」にした。それは僕には真実だったが、僕の答案はあいにく先生には気に入らなかった。

「雲などはどこが美しい？ 象もただ大きいばかりじゃないか？」

先生はこうたしなめたのち、僕の答案へ×印をつけた。

三二 加藤清正

加藤清正は相生町二丁目の横町に住んでいた。と言つてももちろん鎧武者ではない。ごく小さい桶屋だった。しかし主人は標札によれば、加藤清正に違いなかつた。のみならずまだ新しい紺暖簾の紋も蛇の目だった。僕らは時々この店へ主人の清正を覗きに行った。清正は短い髭を生やし、金槌や鉋を使っていた。けれども何か僕らには偉そうに思われてしかたがなかつた。

## 三三 七不思議

そのころはどの家もランプだった。したがってどの町も薄暗かった。こういう町は明治とは言い条、まだ「本所ほんじよの七不思議」とは全然縁のないわけではなかった。現に僕は夜学の帰りに元町通りを歩きながら、お竹倉の藪やぶの向こうの莫迦ばか囉ばやしを聞いたのを覚えてる。それは石原か横網かにお祭りのあつた囉らしだったかもしれない。しかし僕は二百年たぬき来の狸の莫迦囉ばかしではないかと思ひ、一刻も早く家へ帰るようにせつせと足を早めたものだった。

## 三四 動員令

僕は例の夜学の帰りに本所警察署ほんじよの前を通った。警察署の前にはいつもと変わり、高張り提灯ちようちんが一對ともしてあった。僕は妙に思いながら、父や母にそのことを話した。が、誰も驚だれかなかつた。それは僕の留守るすの間に「動員令発せらる」という号外が家うちにも来ていたからだつた。僕はもちろん日露戦役に関するいろいろの小事件を記憶している。が、この一對の高張り提灯あきやほど鮮かに覚えているものはない。いや、僕は今日でも高張り提灯を見るたびに婚礼や何かを想像するよりもまず戦争を思い出すのである。

## 三五 久井田卯之助

ひさいだ  
久井田という文字は違っているかもしれない。僕はただ彼のこ  
とをヒサイダさんと称していた。彼は僕の実家にいる牛乳配達の  
一人だった。同時にまた今日ほどたくさんいない社会主義者の一  
人だった。僕はこのヒサイダさんに社会主義の信条を教えてもら  
った。それは僕の血肉には幸か不幸か滲<sup>し</sup>み入らなかつた。が、日  
露戦争中の非戦論者に悪意を持たなかつたのは確かにヒサイダさ  
んの影響だった。

ヒサイダさんは五、六年前に突然僕を訪問した。僕が彼と大人<sup>おとな</sup>

同士の社会主義論をしたのはこの時だけである。（彼はそれから何か月もたたずに天城山あまぎさんの雪中に凍死してしまった）しかし僕は社会主義論よりも彼の獄中生活などに興味を持たずにはいられなかった。

「夏目さんの『行人こうじん』の中に和歌の浦へ行つた男と女とがとうとう飯を食う気にならずに膳ぜんを下げさせるところがあるでしょう。あすこを牢ろうの中で読んだ時にはしみじみもつたないと思ひましたよ」

彼は人ひと懐なつこい笑顔えがおをしながら、そんなことも話していったものだった。

三六 火花

やはりそのころの雨上がりの日暮れ、僕は馬車通りの砂利道を一隊の歩兵の通るのに出合った。歩兵は銃を肩にしたまま、黙って進行をつづけていた。が、その靴は砂利と擦れるたびに時々火花を発していた。僕はこのかすかな火花に何か悲壮な心もちを感じた。

それから何年かたったのち、僕は白柳秀湖氏の「離愁」とかいう小品集を読み、やはり歩兵の靴から出る火花を書いたものを発見した。(僕に白柳秀湖氏や上かみつかさ司小剣氏の名を教えたものもあるいはヒサイダさんだったかもしれない)それはまだ中学

生の僕には僕自身同じことを見ていたせいか、感銘の深いものに  
違いなかった。僕はこの文章から同氏の本を読むようになり、い  
つかロシヤの文学者の名前を、——ことにトウルゲネフの名前を  
覚えるようになった。それらの小品集はどこへ行ったか、今も  
う本屋でも見かけたことはない。しかし僕は同氏の文章にいまだ  
に愛惜を感じている。ことに東京の空を罩こもめる「鳶とび色の靄もや」な  
どという言葉に。

三七 日本海海戦

僕らは皆日本海海戦の勝敗を日本の一大事と信じていた。が、

「今日晴朗なれども浪高し」の号外は出ても、勝敗は容易にわか  
らなかつた。するとある日の午飯ひるめしの時間に僕の組の先生が一人、  
号外を持って教室へかけこみ、「おい、みんな喜べ。大勝利だぞ」  
と声をかけた。この時の僕らの感激は確かにまた国民的だったの  
であろう。僕は中学を卒業しない前に国木田独歩の作品を読み、  
なんでも「電報」とかいう短篇にやはりこういう感激を描いてあ  
るのを発見した。

「皇国の興廢この一挙にあり」云々うんぬんの信号を掲げたということ  
はおそらくはいかなる戦争文学よりもいつそう詩的な出来事だつ  
たであろう。しかし僕は十年ののち、海軍機関学校の理髪師に頭  
を刈ってもらいながら、彼もまた日露の戦役に「朝日」の水兵だ

った関係上、日本海海戦の話をした。すると彼はにこりともせず、きわめてむずうさにこう言うのだった。

「なに、あの信号は始終でしたよ。それは号外にも出ていたのは日本海海戦の時だけです」

### 三八 柔術

僕は中学で柔術を習った。それからまた浜町はまちょうがし河岸の大竹という道場へもやはり寒稽古かんげいこなどに通ったものである。中学で習った柔術は何流だったか覚えていない。が、大竹の柔術は確か天真揚心流だった。僕は中学の仕合いへ出た時、相手の稽古着へ手を

かけるが早いか、たちまちみごとな巴ともえな投げを食い、向こう側に控えた生徒たちの前へ坐すわつていたことを覚えている。当時の僕の柔道友だちは西川英次郎一人だった。西川は今は鳥取とっとりの農林学校か何かの教授をしている。僕はそののちも秀才と呼ばれる何人かの人々に接してきた。が、僕を驚かせた最初の秀才は西川だった。

### 三九 西川英次郎

西川は渾名あだなをライオンと言った。それは顔がどことなしにライオンに似ていたためである。僕は西川と同級だったために少な

らず啓発を受けた。中学の四年か五年の時に英訳の「獵人日記」だの「サツフオオ」だのを読みかじったのは、西川なしにはできなかったであろう。が、僕は西川には何も報いることはできなかつた。もし何か報いたとすれば、それはただ足がらをすくつて西川を泣かせたことだけであろう。

僕はまた西川といつしよに夏休みなどには旅行した。西川は僕よりも裕福だつたらしい。しかし僕らは大旅行をしても、旅費は二十円を越えたことはなかつた。僕はやはり西川といつしよに中里介山氏の「大菩薩峠」に近い丹波山という寒村に泊まり、一等三十五銭という宿賃を払つたのを覚えている。しかしその宿は清潔でもあり、食事も玉子焼などを添えてあつた。

たぶんまだ残雪の深い赤城山へ登った時であろう。西川はこごみかげんに歩きながら、急に僕にこんなことを言った。

「君は両親に死なれたら、悲しいとかなんとか思うかい？」

僕はちよつと考えたのち、「悲しいと思う」と返事をした。

「僕は悲しいとは思わない。君は創作をやるつもりなんだから、そういう人間もいるということを知っておくほうがいいかもしれない」

しかし僕はその時分にはまだ作家になろうという志望などを持っていたわけではなかった。それをなぜそう言われたかはいまだに僕には不可解である。

## 四〇 勉強

僕は僕の中学時代はもちろん、復習というものをしたことはなかった。しかし試験勉強はたびたびした。試験の当日にはどの生徒も運動場でも本を読んだりしている。僕はそれを見るたびに「僕ももっと勉強すればよかった」という後悔を伴った不安を感じた。が、試験場が出るが早いか、そんなことはけろりと忘れていた。

## 四一 金

僕は一円もたらの金を貰い、本屋へ本を買いに出かけると、なぜか一円の本を買ったことはなかった。しかし一円出しさえすれば、僕が欲ほしいと思う本は手にはいるのに違いなかった。僕はたびたび七十銭か八十銭の本を持ってきたのち、その本を買ったことを後悔していた。それはもちろん本ばかりではなかった。僕はこの心もちの中に中産下層階級を感じている。今日でも中産下層階級の子弟は何か買いものをするたびにやはり一円持っているもの、一円をすっかり使うことにしゅんじゅん 逡巡してはいないであろうか？

## 四二 虚栄心

ある冬に近い日の暮れ、僕は元町通りを歩きながら、突然往来の人々が全然僕を顧みないのを感じた。同時にまた妙に寂しさを感じた。しかし格別「今に見ろ」という勇氣の起こることは感じなかった。薄い藍色に澄み渡った空には幾つかの星も輝いていた。僕はこれらの星を見ながら、できるだけ威張って歩いて行つた。

### 四三 発火演習

僕らの中学は秋になると、発火演習を行なつたばかりか、東京のある聯隊れんたいの機動演習にも参加したものである。体操の教官――ある陸軍大尉はいつも僕らには厳然としていた。が、実際の機

動演習になると、時々命令に間違いを生じ、おお声に上官に叱しかられたりしていた。僕はいつもこの教官に同情したことを覚えてい  
る。

#### 四四 渾名

あらゆる東京の中学生が教師につける渾名あだなほど刻薄に真実に迫  
るものはない。僕はあいにく今日ではそれらの渾名を忘れてい  
るが、今から四、五年前、僕の従姉いとこの子供が一人、僕の家うちへ遊びに  
来た時、ある中学の先生のことを「マツポンがどうして」などと  
話していた。僕はもちろん「マツポン」とはなんのことかと質問

した。

「どういふことも何もありませんよ。ただその先生の顔を見ると、マツポンという気もちがするだけですよ」

僕はそれからしばらくののち、この中学生と電車に乗り、偶然その先生の風<sup>ふう</sup>豊<sup>ほう</sup>に接した。するとそれは、——僕もやはり文章ではどういふ真実を伝えることはできない。つまりそれは渾名どおり、正<sup>まさ</sup>に「マツポン」という感じだった。

（大正十五年三月—昭和二年一月）





# 青空文庫情報

底本：「河童・玄鶴山房」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年11月30日改版初版発行

1979（昭和54）年9月20日改版14版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：一色伸子

校正：小林繁雄

2001年1月29日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 追憶

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>